

～ 英国ロイヤル・バレエ団公演 / Noism 公演によせて ～
薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 57

バレエ・ブラン (白のバレエ) ～ 『ジゼル』と『ラ・バヤデー』～

展示期間 /
2016年6月18日(土) ～ 2016年7月20日(水)

企画・構成 /
関典子 (薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

2016年7月初旬、兵庫県立芸術文化センターでは、英国ロイヤル・バレエ団『ジゼル』および Noism 1 × Noism 2 『劇的舞踊 ラ・バヤデー—幻の国』が、上演されます。この2つの公演に因み、第57回常設展は「バレエ・ブラン (白のバレエ) ～ 『ジゼル』と『ラ・バヤデー』～」をテーマに構成いたしました。

一方は伝統的なバレエ、もう一方はコンテンポラリーダンスと演劇の融合と、表現スタイルは異なりますが、ここに展示する歴史的な資料は、それらの源流とも言えるものであり、新たな鑑賞体験や解釈を紡ぎ出す一助となれば幸いです。どうぞごゆっくり、ご覧ください。

バレエ・ブラン (白のバレエ Ballet Blanc)

ロマンティックバレエの系譜を引き、バレリーナ達が白い衣装で踊る場面または 作品を指す用語。初出は1832年の『ラ・シルフィード』(振付：フィリップ・タリオーニ)とされ、他の代表的な例として、『ジゼル』第2幕(ウィリ=精霊たちの森の場面)、『ラ・バヤデー』第3幕(影の王国)、『白鳥の湖』第2・4幕(湖畔の場面)などが挙げられる。

「バレエ・ブラン」は、妖精や精霊など「この世ならぬもの」や、幻覚や夢など「非現実的な世界」を表現するのに適した形式であった。1822年頃から実用化されたガス灯の青白い照明の中で、紗を幾重にも重ねた衣装を身につけて踊るバレリーナの姿は、多くのリトグラフ(版画・アンティークプリント)に描かれており、その夢幻的な姿を現代に伝えてくれている。

『ジゼル(Giselle)』

〈振付〉ジャン・コラリ、ジュール・ペロー
〈音楽〉アドルフ・アダン
〈原作〉ハインリッヒ・ハイネ『ドイツ論』

〈台本〉テオフィール・ゴーティエ 他
〈初演〉1841年6月28日 パリ・オペラ座
カルロッタ・グリジ(ジゼル)、
リュシアン・プティパ(アルブレヒト) 他
〈解説〉舞台はドイツの農村。侯爵アルブレヒトは身分を隠して村娘ジゼルと愛し合っている。ジゼルに心を寄せる森番ヒラリオンは、嫉妬のあまり、アルブレヒトの身分を明かす。恋人の裏切りを知ったジゼルは狂乱し、息絶える。不幸にも未婚のまま死した娘たちがウィリ(精霊)となって真夜中に蘇り、若者を踊りの輪に誘い込み、死に至らしめるという伝説に取材した作品。

『ラ・バヤデー(La Bayadère)』

〈振付〉マリウス・プティパ
〈音楽〉ルートヴィヒ・ミンクス
〈台本〉セルゲイ・フデコフ、マリウス・プティパ
〈初演〉1877年2月4日 サンクトペテルブルク ポリショイ劇場
エカテリーナ・ワゼム(ニキヤ)、
レフ・イワーノフ(ソロル) 他
〈解説〉舞台は古代インド。舞姫ニキヤと戦士ソロルの恋に、ラジャー(王侯)の娘とブラーミン(大僧正)の横恋慕が絡んだ愛憎悲劇。インド風の異国情緒と、阿片を吸ったソロルが訪れる「影の王国」の幻影たちによる「白のバレエ」シーンのコントラストも最大の見所の一つであり、振付家マリウス・プティパが、クラシックバレエの様式を確立していく道筋を示した作品として位置付けられる。

主な出展リスト

- ◆手彩色アンティークプリント
カルロッタ・グリジ『ジゼル』(フランス 1841年)
マリー・タリオーニ『ラ・バヤデー』(フランス 1831年頃)
- ◆ポストカード
ガリーナ・ウラノワ『ジゼル』(ロシア 1930年代)
エカテリーナ・ゲルツェル『ラ・バヤデー』(ロシア 1911年)
- ◆舞台写真 アメリカン・バレエ・シアター
『ジゼル』『ラ・バヤデー』(アメリカ 1990年代)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用